
夢の続きか、終わるか

白鳥準

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の続きか、終わりか

【Nコード】

N6312J

【作者名】

白鳥準

【あらすじ】

夜のわずかな時間にしか存在できない男は、深夜のコンビニで少女と会っていた。しかし、日に日に短くなる覚醒時間に、男は少女に別れを告げに行った。

(前書き)

五分企画の裏方記念に自分も適当に書いてみました。

ふと気が付くと、虫の鳴く声がした。それを境にして、暗闇を照らす街灯の淡い光、漆黒の沼にでもなったような濃い黒に覆われたアスファルトが視界に飛び込んでくる。ようやくか思えば、夜の空気が冷たく肌を刺した。上着を着てきていないせいか、かなり肌寒い。二の腕を抱きながら、俺はいつものようにコンビニへ向かった。

俺は夜の間しか存在できない。別に太陽の光を浴びると砂になっってしまうとか、そういうことじゃない。むしろ、日の光を浴びてみたいと思ったこともある。俺の意識が覚醒している時間が、主に夜なだけだ。昼夜逆転だろうと言われたこともあるが、そんな生易しいものじゃあない。これは俺の人格に関する問題だ。そう、俺がこうして意識を覚醒させていられる時間は、どうにも日に日に短くなっているようだ。そしてその原因になんとも思い当たりもあつた。だからこそ、俺はいつものようにコンビニへ向かう。

コンビニの前には、一人の少女が居座っていた。いつもの通りなら深夜二時とか、その辺りの時間帯。少女と呼べる若さのその子は、俺の姿を見つけるとこちらに駆け寄ってきた。

「今日も来たんだ、おじさん」

「ああ、別にやることもないしな。お前こそ今日も来たのか。不良行為は感心しないな」

「別に良いの。どうせお父さんもお母さんも帰ってきてないんだし」

「そうなのか」

「うん」

そうにつこりと笑って言う。少女の瞳の中には憂いの色が見て取れる。本当に少しだけだが、静かな波打ち際のような揺れが眼を覆っている。何が嬉しいのだろうか。母親と父親が帰ってこないこと、ではないだろう。両親が帰ってこないことを喜ぶなら、彼女は家にいるはずだ。外に出るといふことは、家にいたくないということだ。

なんて、少し勘ぐってしまう。こんな何者かも分からないオヤジの所へ駆け寄ってくるのだ。勘ぐらないわけにもいかない。名前は知らない。けれども無関係というわけでもない。そのくらいの少女だ。

「両親は仕事で寝泊りでもしているのか？」

「さあ、知らない。どうせまたどこかで遊んでるんじゃない」

「遊んでるって……お前を放っておいてか」

「どうでもいいじゃん。あいつらは勝手に幸せになってるんだから、あたしが邪魔する意味もない」

寒いのか、ポケットに入れた手を太股で激しく摩擦しながらそう言った。この少女とは最近毎晩会っているが、どうにも家庭環境に難があるようだった。助けてやろうだなんて大層なことは考えていない。しかし、夜の間特にすることもない。短い時間しか意識を保てないのに、その時間を有効的に使う方法が思いつかない。そんなだから、俺はこの少女に肩入れしてやろうなんて思ったのかもしれない。

「もしかしたら、俺はもうここに来れなくなるかもしれない」

「え……？」

彼女は俺のほうを見て固まった。表情からはっきりと動揺が感じられた。

「お前、俺がいなくなったらどうするんだ。ここにいても話し相手はもういなくなるぞ」

「……」

黙っているが、言いたいことは分かる。このコンビニで俺と会ったのはたまたまだろう。誰かと会おうのを求めているわけでもないだろう。それでも人間というものはどうしてか、一つのコミュニケーションという馴れ合いに慣れてしまうと、そこから抜け出すのに少しばかり時間がかかったりするものだ。それが例え偶然であっても、彼女にとってこの会談は大切なものだったのかもしれない。なんて自惚れてしまうくらいに、彼女は辛そうに俯いていた。

「お前も自分の幸せを見つけると良い。こんなところにいたって何も見つからない。こんなことをしている暇があったら、しっかり睡眠でも取って肌の手入れをした方が懸命だというものだ」

返答は無い。年頃の娘の考えることは良く分からない。黙っていたら、去って良いのか分からないじゃないか。たった三十分にも満たない時間しか過ごしていないのに、強烈な眠気が俺を襲っていた。こんなところで寝るわけにもいかない。俺は帰らなきゃいけないんだ。構ってやりたいが、時間が無いんだ。後ろ髪を引かれる想いをしながら、俺は黙ったままの少女に背を向けた。

「あ……」

少女のか細い声が俺を引きとめようとする。だがもう限界だ。深い海に落ちてしまったような心地良い眠気が、身体に染み込むように襲ってくる。後ろから足跡が聞こえてくる。でも俺は振り返らない。ああ、早くベッドに帰ろう。

俺は夜の街を最後にした。

目が覚めると、妙に気分が高ぶっていた。夢の中で何かを残してきたのか、それとも俺自身がまだ夢の続きをみたいのか、それは良く分からない。今までこんなことはなかった。少なくとも夢の正体は知っているが、俺はその夢の中身までは知らないのだ。

時計は朝六時半を指して、俺に出勤を急がせる。適当に食パンを平らげ、冷蔵庫の中から取った牛乳をパックで飲んだ。今朝の変な感覚は忘れよう。どうせもう、二度と感じることの出来なくなる感覚だ。引き出しから袋を取り出し、中に入っている錠剤の薬を数錠取り出して鞆に入れた。今夜は仕事が無スマーチだ。会社で寝泊りするかもしれないから、薬を持って行ったほうが良いだろう。

——この、夢遊病の薬を。

部屋から出て扉にカギを閉める。

と、カギを閉めて振り返った直後、そこに見覚えの無い少女が立

ってこちらを睨んでいた。

「何か……用かな？」

「出して」

「なんだって？」

「鞆の中に入っているもの出してって言ってるの！」

「うわっ」

突然少女は襲い掛かってきて、俺の鞆を奪い取ると、勢い良く開けて中に入っている書類などを乱雑に放り投げた。

「何をするんだ！」

「あった……！」

少女が手に掴んだのは、俺の薬だった。それを自分のポケットに入れると、不敵に笑って言った。

「ねえおじさん。おじさんは、あたしに幸せを見つけろって言ったよね？ だったら、勝手に一人だけで楽になんてなろうとしないで。まだあたしには、あの夜の時間が必要なんだよ」

目の前の少女が何を言っているのか、俺には良く分からない。

でも、どうしてか、今朝のあの高ぶりと似た気分の高揚が、ほのかに胸の奥に湧き上がってきているのを俺は感じていた。

(後書き)

SSの才能は僕には無いようです。どうも白鳥です。

評価する側なのにこんな作品を書いて良いんだろうか。SSって難しいですね。企画参加者さまたちには頭が上がりません。なんだ歴代の人たちのセンスは。恐ろしい……。

そのうち、同じ「夜」をテーマにした2万字くらいの短編書きます。何か作品書いてないとなまるよホント……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6312j/>

夢の続きか、終わりか

2010年10月8日15時36分発行